

平成26年度愛知県心身障害者コロニー 発達障害研究所 県民講座

-人を診てヒトを観る-

摂食嚥下機能の障害と対応 講演抄録集

平成 27 年 2 月 14 日 (土)



プログラム

13:35 開会の辞

発達障害研究所 所長 細川 昌則

13:40 「摂食嚥下障害の要因とその臨床所見について」

副題：一舌機能の乳児期から高齢者まで

愛知県心身障害者コロニー 中央病院 非常勤歯科医師（前臨床第七部長）

朝日大学歯学部 障害者歯科 非常勤講師 石黒 光

14:30 「摂食嚥下のメカニズムとその評価について」

愛知県心身障害者コロニー 発達障害研究所

機能発達学部 主任研究員 伊東 保志

休憩（20分）

15:30 「摂食嚥下障害の症状から観た食事介助方法について」

愛知県心身障害者コロニー 中央病院

摂食嚥下障害看護 認定看護師 HCU 病棟師長 佐久本 毅

16:15 質疑応答

16:35 閉会の辞

発達障害研究所 副所長 若松 延昭

発達障害研究所県民講座講演要旨

講演 I 「摂食嚥下障害の要因とその臨床所見について」

副題：一舌機能の乳児期から高齢者まで一

石黒 光

愛知県心身障害者コロニー 中央病院 非常勤歯科医師(前臨床第七部長)

朝日大学歯学部 障害者歯科 非常勤講師

人が食べる行為は、日常的には無意識に行っています。それが、さまざまな要因で上手に食べられない、のみこめなくなった時、当たり前に行っていた動作だけに、本人も介護者もその対応に戸惑うことが多いと思います。

近年、このような摂食嚥下機能に関しては、X線造影や内視鏡の発展等もあり急速に研究が進み、そのメカニズムが解明されつつあり、症状に応じた訓練法、食事介助法、食形態の工夫などが学際的にすすめられています。

今回、通常は外部から見るできない「食べてのみこむ機能」を乳児期どのようにして獲得してきたか、私たちがどのようなプロセスで口腔から咽頭まで食物を処理しているかを動画や図で提示します。その中で、とくに歯科医師として、口腔内で食物をのみこみやすく咀嚼して舌で咽頭に送り込むまでの、随意的な「舌」の働きについて、その発達過程から健常者の機能と種々の要因で機能障害が生じた場合の状態や形態の変化などについて、解説したいと思います。

そのうえで、何らかの疾患や障害でスムーズに食べられなくなり、誤嚥性肺炎などを生じる原因との関係についても触れたいと思います。

講師略歴

1973年 愛知学院大学歯学部卒業

同 名古屋市立大学口腔外科 助手

1978年 愛知県心身障害者コロニー中央病院歯科 勤務

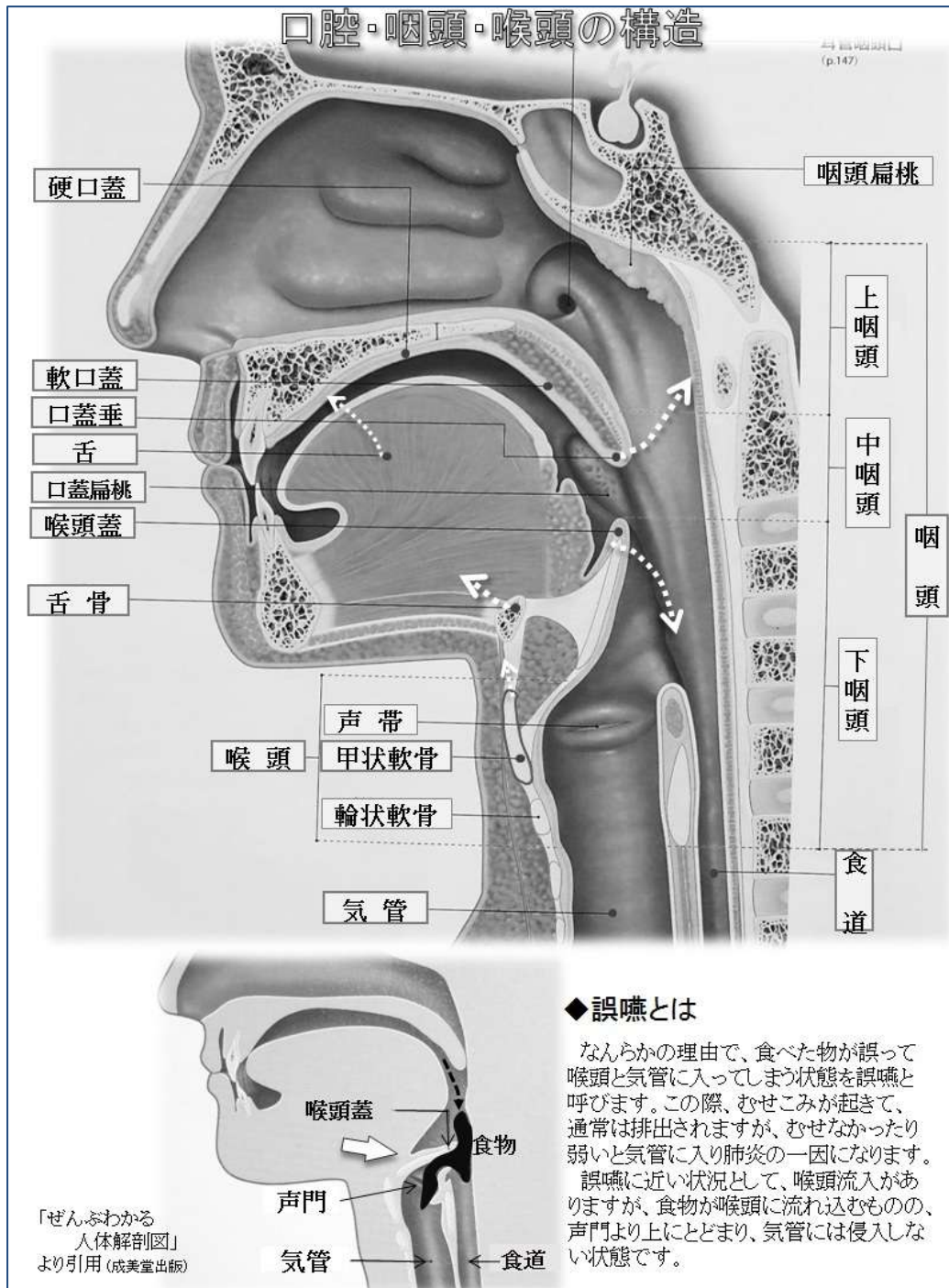
1988年 同 歯科部長

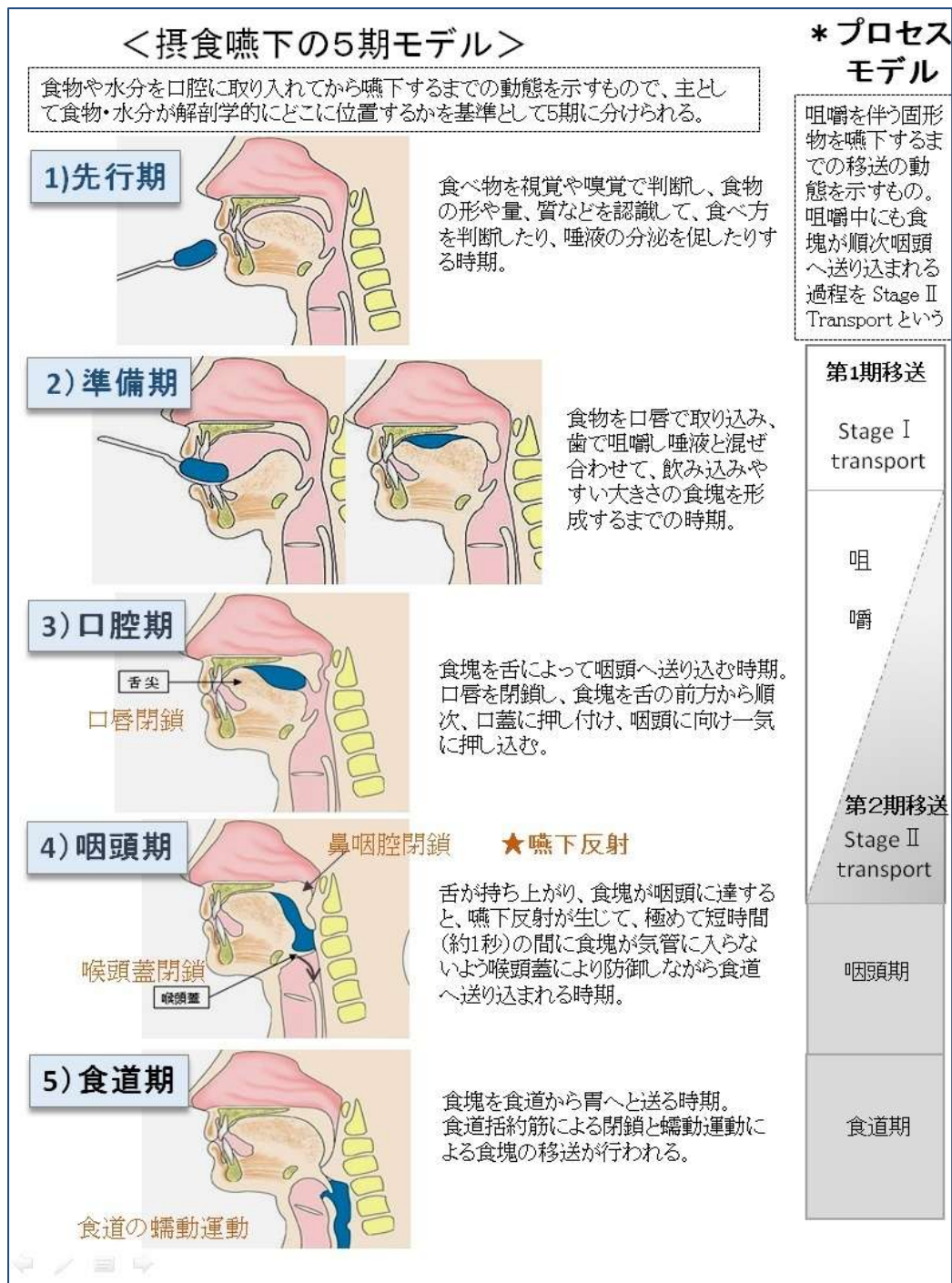
2014年～ 同 退職後 嘱託歯科医

朝日大学歯学部 障害者歯科 非常勤講師

重症児・児童デイサービス NPO 法人「ひろがり」 嘱託歯科医

<図1>





講演Ⅱ 「摂食嚥下のメカニズムとその評価について」

伊東 保志

愛知県心身障害者コロニー 発達障害研究所 機能発達学部 主任研究員

「口からものを食べる」ということは、人が生きる上で必要な栄養を摂取するだけでなく、それ自体が楽しみであり、できなければ生活の質(QOL)の低下にもつながる日常生活動作(ADL)です。この動作、すなわち摂食嚥下運動は、食べ物の通り道の周辺にある数多くの筋群が高い再現性をもつ精緻なパターンに基づいて連続して活動することによって達成されています。そして、その一連の運動のどこかが破綻することによって摂食嚥下機能の低下は起こります。私どもの研究室では、摂食嚥下運動をはじめ、人が普段なにげなく行っている身体運動のしくみを調べるとともに、身体運動機能を評価する方法について検討しており、その研究成果をもってADLやQOLの向上に貢献することを目指しています。摂食嚥下機能については、筋音図なる新しい信号を用いた嚥下関連筋の機能評価について検討を行っています。

本講演では、正常な摂食嚥下および誤嚥のメカニズムについて概説するとともに、摂食嚥下機能の検査・評価方法についてこれまでに提案され実用化されているものから私どもの研究を含む新しい試みまでを紹介したいと思います。

講師略歴

1988年 愛知工業大学工学部 卒業

1992年 大同工業大学大学院工学研究科 修了

鈴鹿医療科学大学医用工学部・助手

2004年 名古屋大学より博士(工学)を取得

2005年 愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所 研究員

2012年から 現職

講演Ⅲ 「摂食嚥下障害の症状から観た食事介助方法について」

佐久本 毅

愛知県心身障害者コロニー 中央病院摂食嚥下障害看護 認定看護師 HCU 病棟師長

自分の不調を上手く言葉にできない、自分の身体を上手くコントロールできない摂食嚥下障害のある方にとって、「食べる」ことが楽しい場になるか否かは、介助する側に左右されることが多くあります。また、摂食嚥下障害を有する障害児(者)では、上手く食べられない要因は様々で、その要因が1つとは限りません。上手く食べられない方たちを目の前にしたとき、まずは周りが摂食嚥下障害に気づき、どうすれば楽しく安全に食べることができるのか、その「介助方法」を考えていく必要があります。しかし、介助方法を単にテクニックとして捉えるのではなく、摂食嚥下障害を起こしている要因は何か、その要因を少しでも減らす環境調整を考えていくことが、大切なのだと思います。今回、摂食嚥下障害でよく見られる症状や状況、疾患的な特徴など当院での事例を通し、食事介助する側がどのようなことを注意し、環境を整えていくかという点を中心に紹介していきたいと思います。

略歴： 1990年 愛知県立春日井看護専門学校卒業

1992年 愛知医科大学付属病院 手術室勤務

1993年 愛知県心身障害者コロニー勤務 現在神経内科病棟勤務

2008年 摂食嚥下障害看護認定看護師 資格取得

<メ モ>

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....